

## 聖歌斉唱におけるデスカントの歴史と用法

スコット・ショウ 当研究所所員  
吉村順邦翻訳

聖歌隊を持つ教会では、会衆による聖歌斉唱に合わせてデスカントと呼ばれる装飾的な声部が歌われることがよくある。デスカントは、聖歌の旋律にオルガン伴奏にはない華やかさと高揚感を付加する効果を持ち、ことに全会衆が斉唱する入堂聖歌や退堂聖歌にデスカントが加わると、礼拝はより壮麗かつ劇的な印象を帯びる。

本稿ではまず、デスカントの起源を20世紀初頭の英国にたどる。ただし筆者の意図はこのテーマを学究的に掘り下げることよりも、聖歌隊によるデスカント演奏のための実用的な資料を提供することにある。今日用いられているデスカントの起源について述べた後、一部教派の聖歌集におけるデスカントの収録状況について概観し、最後にデスカントの活用および作曲に関する実際的なコメントと、筆者が立教大学諸聖徒礼拝堂のために作曲した10の実例を示す。本稿が、日本の教会の礼拝、典礼および儀礼においてデスカントの利用を促進する一助となれば幸いである。

英語圏の主なプロテスタント教派の聖歌集を概観すると、デスカントが広く用いられていることが分かる。たとえば米国聖公会の聖歌集"Hymnal 1982"には720曲の聖歌が収められているが、うち30曲はデスカントを伴っている。ところが、その旧版である"Hymnal 1940"にはデスカントは1つも見当たらない。とすると、聖歌にデスカントを加える慣行は比較的最近のものなのだろうか？ 調べてみると、デスカントの歴史に触れた資料は意外に少ない。"New Grove Dictionary"<sup>i</sup> (脚注)には"Discant"の項目があるが、指しているのは16世紀まで広く用いられていた別の音楽装飾様式である。一方、"Grove Concise Dictionary of Music"にはデスカント(descant)について「聖歌の旋律の上に付加される華麗な高声部を指す場合もある」という簡潔ながら有用な定義が記されている。<sup>ii</sup>実際にはデスカントがすべて華麗とは限らないが、少なくとも「聖歌の旋律に付加されるより高い声部」という定義は実用に耐えるものである。

現在の形のデスカントを伴った初期の聖歌集としては、ジェフリー・ショー(1879-1943)の"The Descant Hymn-Tune Book"(1925)がある。<sup>iii</sup>ショーは英国人で聖公会の作曲家兼オルガニストを務めていた。このデスカント集の前文はショーではなくHBというイニシアルの人物が書いたものだが、そこには当時のデスカントの用法や起源に関する貴重な情報が含まれている。

「近年の教会音楽では、かつて用いられていた手法や曲が復活する傾向が広く見られ、その中には遠い過去のものも含まれる。……中でも最もポピュラーでシンプルなものの1つにデスカントが含まれていることは喜ばしい。デスカントは、有能なトレブル[ボーイソプラノ]が数人いればどの教会でも採用できる類のものである」<sup>iv</sup>

この前文ではさらに、デスカントとそれに先立つフォーブルドン(faux-bourdon)と呼ばれる技法の違いにも触れ、フォーブルドンは聖歌の旋律をテノールに置いて和声を付けたもの、としている。テノールに聖歌の旋律を置くことで、最上声部(トレブルないしソプラノ)は自動的にデスカントとなるわけだが、この手法の源流は中世時代の音楽に見ることができる。しかしながら、聖歌の旋律を上声部に置き、より高

い新たな旋律をこれに加えるデスカントの手法は、ショーのデスカント集では過去の慣行の復活と記されているが、実際は20世紀初頭に出現したものと考えべき事情がある。とすれば、今日歌われているようなデスカントは今からおよそ1世紀前に発生したと見るのが妥当であろう。ショーによるデスカントの作例(例1)を見ると、オルガンパートはデスカントを支える目的で書かれていることが分かる。聖歌の旋律はアルトの声部に移され、原曲の和声にもやや変更が加えられている。

この聖歌集では曲そのものに加えて、デスカントの用法についての解説も前文に記されている。要点を列挙すると、以下のとおりである。

1. デスカントは長い聖歌の中で会衆にひと息入れさせることを目的としたもので、過度に用いてはならない。
2. 4~5節の聖歌ではうち1節、6~7節の聖歌の場合のうち2節にデスカントを付けてもよいが、1曲の聖歌に3節ないし4節以上デスカントを付けるべきではない。
3. デスカントの対象には、そうした修飾を施すにふさわしい歌詞を持った節を選ぶこと。
4. リフレインのある聖歌では各節のリフレインでデスカントを用いてもよいが、1節全体にデスカントを付けるのは最後の節に限る。
5. 聖歌隊に実力があって会衆も多く、聖歌隊のトレブルもしっかりしている場合、デスカントの付く節はアカペラで歌うとよい。これは建物の残響が多い場合に特に効果的である。
6. 一般にデスカントはトレブル全員に歌わせるのが最善である。ただし聖歌隊がきわめて多人数の場合は、トレブルの一部が聖歌の旋律を受け持ち、残りがデスカントを歌う形にしてもよい。
7. 教会音楽にデスカントなど新しい要素を導入する場合は、十分な配慮が必要である。会衆はデスカント等の歌唱を概して歓迎するが、事前に説明やリハーサルが必要となるケースもある。

例 1

AUSTRIA  
8. 7. 8. 7. D

F. J. Haydn, 1732—1809

The image displays a musical score for the hymn 'Austria' by Franz Joseph Haydn. The score is presented in two systems. The first system shows the original piece, consisting of a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (grand staff). The second system is labeled 'DESCANT' and 'MELODY' and shows a descant of the melody line (treble clef) and a piano accompaniment (grand staff). The key signature is one flat (B-flat major/D minor) and the time signature is common time (C). The descant section is marked with a repeat sign and a first ending. The number '15207' is printed at the bottom center of the page.

"The Descant Hymn-Tune Book"より "Austria"のデスカント譜

デスカントの歴史に関する最近の資料の1つに、クラーク・キンバーリングが2回に分けて専門誌に掲載した論文"Hymn Tune Descants"がある。<sup>v</sup> キンバーリングはこの研究で、(現代的な意味での)デスカントが最初に使われ出したのは20世紀初頭のイギリスだったことを示している。また、アセルスタン・ライリー著“Concerning Hymn Tunes and Sequences”(ロンドン、1915)の中の「フランスの教会旋律」と題された章には、2声と4声のフォーブルドンに関する記述がある。ここでライリーは4声のフォーブルドンをフランス固有のものとし、その拠り所として「ほとんど知られていないある書物」を挙げている。<sup>vi</sup> しかし我々にとってより興味深いのは、ここに挙げられた2声の作品は1曲を除いてすべてイギリス人が作曲した可能性が高い、という点である。<sup>vii</sup> これは、今日用いられている形のデスカントがフランスではなくイギリスで発祥したことをうかがわせる。ジェフリー・ショーは1934年にデスカント付き聖歌の第2集を出版しているが、その頃にはすでに、イギリスほか英語を母国語とする国では会衆の斉唱にデスカントを加える慣行が「深く定着していた」。<sup>viii</sup>

20世紀初頭にこうしたデスカント作曲ブームが巻き起こったきっかけは何だったのだろうか。おそらく、1906年に出版された"The English Hymnal"がデスカントへのニーズを高めたことは想像に難くない。その前文によれば、同書は「英語の歌詞による最も優れた聖歌集」を目指したものであった。<sup>ix</sup> この聖歌集は2つの点でまさに画期的だった。1つは、それまでイギリスの教会ではあまり歌われる機会のなかった曲、たとえばプレーンソング(グレゴリオ聖歌)、ドイツのコラール、イギリス民謡の旋律などが、よりなじみ深い19世紀の聖歌(“Hymns Ancient and Modern”(1861)に含まれるものなど)と並んで収録されたことである。この"The English Hymnal"を編集したのは、作曲家レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872-1958)であった。そうしてみれば、収録された曲が多様性に富み包括的で、そのうえ高いクオリティを保っているのもうなずける。しかし、この聖歌集にデスカントは含まれていなかった。キンバーリングは、この優れた曲集の出版がきっかけとなってデスカントへのニーズが生まれた、との見方を示している。<sup>x</sup> いずれにせよ、この曲集の出版から数十年の間にデスカント集が現れ始めたことは、おそらく偶然ではないだろう。上述したライリーとショーも、“The English Hymnal”(および“Hymns Ancient and Modern”)の収録曲に合わせたデスカントを作曲している。

この時代に出版されたもう1つの重要な初期デスカント集に、アラン・グレイの“A Book of Descants”(150曲収録、1926)がある。こうしたデスカント集の出版と並行して、聖歌集の中にもデスカントが登場し始めた。1925年版の“Songs of Praise”は、相当数のデスカントを収録した最初の聖歌集である<sup>xi</sup>。その多くは、以前のデスカント集に含まれていたものだった。次の版(1931)には、グレイのデスカント集その他からのデスカントも収録された。1930年代までには、デスカントを歌う慣行がイギリスや海外の教会ならびに学校に深く根付いていた。今日では多くの主要な聖歌集にデスカントが含まれており、各種のデスカント集も容易に購入できる。主要な教会では、デスカントを歌う慣行が広く受け入れられている。

では日本の状況はどうだろうか。日本最大のプロテスタント宗派である日本基督教団の讃美歌集を見ると、この問題についての関心がどのように変化してきたかが分かる。1954年の「讃美歌」には548曲の讃美歌が含まれているが、デスカントは1つもない。しかし、その10数年後に出た「讃美歌第二編」(1967)には、259曲の讃美歌のうち14曲にデスカントが含まれている(4番、29番、41番、42番、131番、216番、241番、242番、243番、244番、245番、246番、247番、248番)。その序文

では、デスカントが日本ではまだ新しい試みであることと、その望ましい用法について触れている。「デスカントとその使用について」と題された段落の一部を、以下に引用する。

「わが国の讃美歌集としては新しい試みとして、デスカントを付けた曲がある。デスカントとは、ソプラノ（メロディー）の上に付けた装飾的な声部で、独唱またはソプラノ斉唱によって歌うか、ヴァイオリンやフルートなどの楽器で演奏してもよい。……デスカントは、かなりはなやかな効果を持つから、その使用には節度が必要である。式典的な性格を持つ日の礼拝や、学校などの行事で用いたり、クリスマス、イースターなどの諸集会で用いたりするのがよい。」<sup>xii</sup>

1976年には「讃美歌」の最後の補遺として「ともにうたおう」が付加された。50曲からなるこの歌集では、デスカントは1曲（45番）のみである。その後、「讃美歌」とその補遺に代わるものとして登場した全579曲の「讃美歌21」（1997）では、興味深いことに（あるいは残念ながら）デスカントは1つも含まれていない。少なくとも日本基督教団に関しては、讃美歌集にデスカントを含める試みは短命で、1970年代に終結したようである。

では、日本にはデスカントへの需要やニーズがないのだろうか？ 確かに、日本の教会は概して小規模で、聖歌隊もない場合が多い。また、聖歌斉唱にデスカントを加えることが可能な場合であっても、会衆が少人数であれば、デスカントは礼拝に彩りを添えるどころか本来の聖歌斉唱の妨げにもなりかねない。しかし、聖歌隊を持つ大都市の教会や、キリスト教系の学校・大学などでは、デスカントをより積極的に用いる余地は大いにあると考えられる。以下に掲載した10例のデスカントが実際に活用されることを望むと同時に、これらが聖歌斉唱に伴うデスカントへの興味を高める役に立つことを願ってやまない。

参考までに、デスカントの使用と作曲に関する実際的な注意点を挙げておく。

## 1. デスカントの使用について

1. デスカントは会衆になじみの深い聖歌にのみ用いるべきである。本来デスカントは会衆による斉唱を強化すべきものであり、その勢いをそいではならない。
2. デスカントを受け持つ聖歌隊のトレブル（ソプラノ、ボーイソプラノ）は、自信を持って歌えるよう十分練習を積んでおくこと。音程が不確かで声にも勢いがいないデスカントは、むしろないほうがよい。
3. オルガニストと聖歌隊指揮者は、オルガン伴奏がデスカントで想定されている和声と一致するかどうかをあらかじめ確認し合うこと。デスカントには、通常の聖歌伴奏がそのまま利用できるものと、特別なオルガン伴奏を必要とするものがあるからである。
4. デスカントの使用は、1回の礼拝で歌われる聖歌のうち1曲か2曲のみ、そして各曲につき1節だけにとどめておくのが好ましい。どの節を選ぶかは聖歌の歌詞を見て判断する。必ずしも最終節にデスカントを用いるのが最善とは限らない。
5. 従来デスカントになじみのなかった教会で初めてデスカントを用いる場合は、前もってその旨を会衆に伝えておく必要がある。あらかじめ簡単な説明と練習を行っておけば、問題の多くは事前に解決できる。

6. 聖歌隊の上声部がデスカントを受け持つときも、聖歌隊の一部は主旋律を力強く歌い続けることが望ましい。聖歌の旋律は常によく聞こえていなければならないからである。

## 2. デスカントの作曲について

1. デスカント声部は、聖歌の旋律より高い音で書かれるのが普通である。ただし、音楽上の理由で部分的に主旋律より低くしてもよく、また会衆の斉唱を強化するため一部を旋律とユニゾンで進行させてもよい。
2. デスカント声部の作曲にあたっては、非常に狭い音域から高い音楽的效果を引き出す工夫が必要である。デスカント声部は聖歌の旋律より通常高く、しかも歌い手の出せる最高音を超えることはできないため、使える音域はおおむね1オクターブないしそれ以下となる。一般に女性ソプラノの場合はデスカント声部にGまで含めることができ、歌い手が経験豊富であればAも使える場合がある。高音の扱いは、担当の歌い手が高音を美しく歌う実力を持っているかどうかを考慮して、慎重に判断する。
3. デスカントも通常の作曲ルールに従い、音楽的な自立性と明確なクライマックスを備えていなければならない。最高音域を多用しすぎるとデスカントの存在感がかえって希薄になるので、最高音は音楽上ないし歌詞の意味上の要所に限定して使うのが望ましい。
4. デスカントは声に限らず、楽器で演奏しても効果的である。満場の会衆が朗々と斉唱する中でトランペットがデスカントを奏できれば、心を揺さぶる音楽的な礼拝体験が生まれるであろう。ただし器楽を想定して作曲する場合は、各楽器の特長や効果的な音域を考慮する必要がある。たとえばトランペットのデスカントには付点リズムや装飾的な動きを用いるのもよいだろうし、フルートのデスカントであればカンタービレとするのも効果的である。

## デスカント集

ここに掲載したデスカントは自由に複製して使っていただいて構わない。楽曲の著作権はスコット・ショウが所有している。これらは筆者のホームページ

([http://scottshaw.org/?page\\_id=150](http://scottshaw.org/?page_id=150)) からダウンロードできる。ご意見を電子メールで shaw@rikkyo.ne.jp までお寄せいただければ幸いです。

## 備考

これらのデスカントは“ah”又は歌詞で歌う。デスカントの中に見られるタイは“ah”で歌われる時にのみ使われ、歌詞で歌われる際には適しない。

NSKK: 日本聖公開「聖歌集」

KS21: 日本基督教団「讚美歌 2 1」

KDSB: 日本基督教団「讚美歌」

- i *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, s.v. "Descant," by Rudolph Flotzinger and Ernest H. Sanders.
- ii *The Grove Concise Dictionary of Music*, s.v. "Descant."
- iii Geoffrey Shaw, *The Descant Hymn-Tune Book, Book I*. (London: Novello and Company, Limited, nd).
- iv *Ibid.*, Preface.
- v Kimberling, Clark. "Hymn Tune Descants Part I: 1915-1934." *Hymn – Journal of Congregational Song* 54 (July, 2003) 20-27.
- vi *Ibid.*, p. 20.
- vii *Ibid.*
- viii *Ibid.*, p. 23.
- ix *The English Hymnal*. Oxford: The Oxford University Press, 1933. Preface p. iii.
- x Kimberling, p. 23.
- xi *Ibid.*
- xii *讚美歌・讚美歌第2編*。Tokyo: 日本基督教団出版局、1974。讚美歌第2編凡例、p. 10.